毎日新聞
2008年（平成20年）6月30日（月）夕刊　2版　文化　4

アンドレ・マルロオの今日的評価高めた議論

秋田での国際会議を開催して――中嶋 嶺雄

去る六月七日から九日まで「アンドレ・マルロオ、思想と美術―東洋、日本の誘惑」と題する国際教養大学主催の国際コロキウムが秋田市で開かれた。主に国際美術史学会のフランス人メンバーを中心に全世界に公募した発題者二十七名が、マルロオの今日的評価を巡って激しい議論をたたかわせた。多数の傍聴者も満足だったようである。

アンドレ・マルロオ＝国際教養大学提供

マルロオは若き日の小説『王道』に見られるようにカンボジアで仏教遺跡を追い求め、やがて一九二五年の香港・広州中心の反帝国主義運動（五・三〇事件）を舞台にした『征服者』や一九二七年の上海の反共クーデターが題材の『人間の条件』でフランスの代表的作家としての名声を獲得した。波乱の多い人生行路のなかで戦後はドゴール大統領の文化相として活躍、パリのオペラ座の天井をシャガールの絵で飾ったことでも知られている。

このようなマルロオは、絵画や彫刻といった美術鑑賞の鬼才でもあり、今回の会議でも国際美術史学会会長のジャニー・アンダーソン女史（メルボルン大学教授）らが論じた「マルロオと空想の美術館」についての議論が一つの基調になっていた。そのマルロオにとって、アジアの芸術がいかに重要な考察対象であったかは、代表的な報告をおこなったアンリ・ゴダール名誉教授（パリ大学ソルボンヌ校）も強調していたが、とくに日本の美に惹かれていたことは、那智の滝、伊勢神宮、竜安寺の石庭、そして京都国立博物館所蔵の日本画「平重盛像」へのマルロオ自身の哲学的啓示が物語っている。全体的にマルロオ崇拝者が多いなかで、今回の会議の組織者であった田中英道氏（国際教養大学美術史特任教授）は、マルロオが実際に鑑賞した日本美術はその一部であり、マルロオが西洋の絵画に見た「ヒント」を日本の絵画には見出していないとマルロオの「限界」を論じていた。

この議論は、ゲストとして参加したフランスの中国学者で歴史家のクロード・カダール氏やチェン・インシアン女史が、二日目の「討論のタベ」でマルロオは実際に中国や中国革命の現場を訪れる以前に『征服者』や『人間の条件』を書いているが、それは許されないことだと批判したこととつながってくる。これに対しては、クロード・タンヌリー氏（ポルト・フランス協会元会長）が猛烈に反駁して一時はどうなることかと思われた。

そこで座長の私は当時の上海の街や租界の様子、市民の生活ぶりや革命グループの動きを実にリアルにそのディテールを描いているマルロオの筆力を称賛し、他方では『人間の条件』の主人公キヨ（Kyo）を周恩来ではないかとみるフランス側の政治的解釈を批判して、ようやくその場を閉じることができた。たぶんマルロオの親友でもあった小松清氏がキヨであろうが、彼はテロリストでありながら実に日本人的な美学を体現している。

日本人論に関しては、和服に威儀を正して報告した井尻千男氏（拓殖大学日本文化研究所長）が三島由紀夫の死に衝撃を受けたマルロオに触れ、武士道とマルロオについて熱弁をふるわれた。わが国の代表的なマルロオ学者でマルロオとも親交のあった竹本忠雄氏（筑波大学名誉教授）は最後に、日本との関連でのアンドレ・マルロオの全体像を神道的な「霊性」への回帰としてまとめていた。

近頃は書店でマルロオの作品を探すことも難しいけれど、彼がもっとも好んだ日本の地で、フランスはもとより米、独、スイスなどの欧米各国や日本、中国、韓国、インドなどアジア諸国の知識人に彼が再び迎えられたことの意味は、けっして小さくないはずである。

（なかじま・みねお＝国際教養大学理事長・学長／国際社会学者）

レジスタンス、美術評論家、文化相と、さまざまな顔をもつマルロオを多面的に論じた国際コロキウム

「毎日歌壇」選者に就任 伊藤一彦さんに聞く

「毎日歌壇」の選者に、7月から伊藤一彦さんが加わる。1984年から選者を務めた玉城徹さんの勇退による就任だ。第10歌集『微笑の空』（角川書店）で、歌壇の最高賞とされる「冠賞」を受けたばかり。地元宮崎県で教員やカウンセラーとして老若男女の心と向き合いつつ歌業を究めてきた伊藤さんに、抱負を語ってもらった。【斉藤希史子】

三十一文字は内なる故郷

わがこころ今夜いづこに泊は見えない読者かもしれない…てせむ広すぎて困る日向の空は…。そんな『対象』に自分の心を聞いてもらう作業が、歌を詠むことだからです」

早大で哲学を専攻。卒業と同時に帰郷し、教員を経てカウンセリングの専門家となった伊藤さん。「話すうちに目の前から私の姿が消え、相談者が心の内をさらけ出せたら、そのカウンセリングは成功」という。

作歌にも、相通じるところがある。「短歌の神様か仏様か、もう一人の自分なのか、あるい辺なさを感じていた私に、短歌の『定型』がよりどころを与えてくれたのです。自由に詠める詩は、大都市のようにつかみどころがない。以来三十一文字が、内なる故郷となりました」

＝川田雅浩撮影

いとう・かずひこ　1943年、宮崎市生まれ。「心の花」会員。宮崎県立看護大教授。他の歌集に『海号の歌』『新月の蜜』など。

ふるさとに長く棲みつつ持つ帰心人には言はず川にも言はず

その古里が生んだ〝国民歌人〟若山牧水の記念文学館（宮崎県日向市）館長も務める。牧水は早大卒業後も東京に残ったが、家庭の事情で一時期、故郷定住の道を探った。「結局、再び上京しますが、宮崎にいた間だけ、牧水は自由律の歌を詠んでいるのです。彼にとって古里のしがらみは打破したい対象。その思いが破調となって表れたのかもしれない。私の体験と、合わせ鏡のように重なります」。「故郷と定型」の問題は、今後も追求したいテーマとなった。

牧水は静岡県沼津市を終のすみかとした。同市にも「若山牧水記念館」があり、玉城徹さんが「沼津牧水会」会員なのも不思議な縁だ。「玉城先生あての投稿を大切に引き継ぐと共に、選者としてはできるだけ、多くの歌と出会いたい。詠む楽しみと同じく、歌は読む喜びも大きいものですから」

選者交代を機に、これまで読むだけだった人にも、詠んで投稿してほしいと願っている。

「心は十人十色。突き詰めればあなたらしさのにじみ出た、非凡な歌が生まれます」

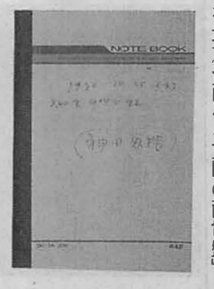
平凡にフツウに生きてゐるひとの喜怒哀楽のフツウや否や（歌はいずれも『微笑の空』より）

「司馬遼太郎が歩いた東京」展開催

東大阪市の記念館で 取材ノートなど展示

司馬遼太郎が歩いた東京を自筆原稿や資料で紹介する「『街道をゆく』司馬遼太郎が歩いた東京」展が、東大阪市の司馬遼太郎記念館で開かれている。

紀行シリーズ『街道をゆく』で司馬が訪ねた東京は、「赤坂散歩」「本所深川散歩」「神田界隈」「本郷界隈」の4地域。江戸市街のなりたちや江戸文化の背景、明治国家が欧米の文明を地方へ配る「文明の配電盤」（『この国のかたち』）の役割を果たした東京を描いた。



会場では、「神田界隈」「本郷界隈」の取材ノートを初公開＝写真。「神田界隈」の取材で使用した書き込みのある千代田区の区分地図や明治の風俗を知るために参考にした最初のグラフ誌『風俗画報』、さらに明治のジャーナリスト、陸羯南が創刊した新聞『日本』などの資料を合わせ計42点を展示し、東京を立体的に表現している。

取材に同行したこともある上村洋行館長は「雰囲気や地形が書斎で調べたこととどう違うかを確認するような作業でした。『街道をゆく』の執筆姿勢を見ていただければ」と話している。

12月14日まで（毎週月曜、9月1～10日休館）。9月に取材ノートなど展示物の追加・入れ替えを行う予定。入館料は大人500円、高・中生300円、小学生200円。問い合わせは同館（☎06・6726・3860）へ。【岸俊光】

◇第3回小説現代長編新人賞（講談社主催）　采樹命（さいき・まこと）さんの「地獄番鬼蜘蛛日誌」に決まった。賞金300万円などが贈られる。

采樹さんは東京都調布市出身、29歳。駿河台大卒。いくつかの職を経て現在は生命保険会社勤務。神奈川県在住。受賞作は7月22日発売の『小説現代』8月号に抄録が掲載される。

また、奨励賞に朝井まかてさんの「実さえ花さえ、この葉さえ」が選ばれた。大阪府出身、48歳。甲南女子大卒。コピーライターとして制作会社に勤務し現在は独立。大阪府在住。

両作とも10月に単行本として刊行される。